

秀歌三十首十今年の収穫

加古陽

光や海うたひよむこと反戦のちからになるかならぬかならぬ
十月号・伊藤 一彦

藍色のあかるさのこる宵の空われを生みたる胎は果てなく
金 有美

斑を美しとおもひ見てみし天牛のこまかき蟻に囲まれゆけり
十一月号・横山未来子

どの夏も一度しかない夏だから言葉で輪郭を調えよ
駒田 晶子

しわしわの桔梗のような茄子の花すべて実になる寂しさに咲く
十二月号・細溝 洋子

木の枝と木の葉としやべらなくなつて冬のひかりが立つてゐる庭
一月号・本田 一弘

一滴を垂らすべくみる虹彩の青きふかみにわたくしがいる
美帆 シボ

トイレットペーパーで涙を拭けり今日もハンカチはわれを忘るる
二月号・小川真理子

子の話すふかや、ふかやは深夜だと気づきし夜の星はきんいろ
佐藤モニカ

CDの歌声はるか果てに鳴り意識の岸をそつと撫でゆく
四月号・佐佐木頼綱

一日に玉葱一個健康法を説かれつつ説かれたつバスまだ来ない
藤島 秀憲

平等な時間などあるはずもなくエレベーターで目焼け止め塗る
齋賀 万智

花すぎて枝のみの梅 今朝見れば滲めるごとく芽の気配見ゆ
五月号・佐佐木幸綱

真珠光帯びてしたたる雪しづりありうべかりしみどりごのこゑ
斎藤佐知子

桜とかヒヤシンスから遠ざかりボクはたたいま眠たい花だ
坪内 稔典

よるべなき思ひに權の手を垂れて春となる日の葦辺にねむる
奥田 亡羊

あらひざらひ影を奪ひに雨は来るすぐ泣く君と沈黙のわれに
六月号・岸並千珠子

春、と呼べば、するでせう目眩が。目眩のやうなうしろめたさが
松本 実穂

褐色の殻より出でて風の朝傷みてひらく辛夷の花は
松橋 雅実

踵上げ夫に着せたる新羽織ほほ糸む写真は遺影となりぬ
三村美壽津

春であるだけでいいのだ春であるなにもなくそれだけで明るい
七月号・矢部 雅之

めだか鉢の浮草ふるふるはせてPFASの小さき雨の降り来る
関沢由紀子

今日きみがくれた小さな親切をこころの台紙にはっておきます
八月号・鈴木 陽美

アイプチが今朝はかわいくできたから夕方までは埴輪でいたい
内山奈津子

熊鈴の配布メールの届くころ山々はふかく霧を抱き込む
水口奈津子
人間の営為としての必要に嘘のひとつを窓口に言ふ
三月号・馬場 昭徳

われ以外（妻と息子と猫）を乗せベッドはカ
ルネアデスの舟板
屋良健一郎
すこし今隙ある身体かかとかから腓返りが入らんとする
堀 亜紀

川の面にぴきんぴきんと水紋が響き新しき雨が降り出す
九月号・福岡 享子
ペランダで身を風に晒す ああこれは南の森を撫でて来た風
小峰 圭子

東京新聞朝刊に出ている「運勢」(寅年)に「霧が立ち込めて歩行困難。本日は一度立ち止まる必要あり」とあった。そうだ、いったん立ち止まって、ゆっくり選ぼう。そう思っ

会った歌を読者の皆さんに紹介する楽しみである。毎月、誰もが良いという歌だけでなく、あまり気づかれない歌を見つけようと努めた。どう紹介しようかと頭を悩ませた。作者はそれぞれ作風が異なり、同じ作者の中に多様性がある。風格のある歌、新しい表現に挑戦した歌、悲しみ、愛、喜びの歌、ユーモアの歌、機知に富んだ歌、社会問題に切り込んだ歌。キュレーターが展示作家と絵を選ぶようにバランスを考え、選を進めていく。

ているのなら「選ぶ」。逆に破綻がなくてもプラスの何かがなければ「選ばない」。野球と違って、短歌にはワンバウンドでもストライクと言うべき球があつていいはずだ。

担当するのは無選歌欄と、選歌欄の選者二人分。毎月、無選歌欄だけで約五十人、三百五十首以上、選歌欄は二人の選者で計百人前後、五首平均として五百首ほど、合わせると八百五十首くらいある。その中から二十五首前後を選ぶ。一年間で三百首。それを十分の一にするのだから、まさに「霧が立ち込めて…」というものである。

「選ぶ」という作為は、「選ばない」という作為と表裏一体にある。それぞれの作為には、理由が伴わなくてはならない。気を付けたのは、一つの疵により「選ばない」と決めつけるのはやめようということである。まず良い点を見る。たとえば疵があつても、美点が上回っ

といったふうを選んでみれば、やはり無選歌欄が多くなつてしまった。坪内さんや横山さん、藤島さん、駒田さん、細溝さん、矢部さん、岸並さんなどは良い歌がたくさんあり、絞り込むのにたいへん苦勞した。選歌欄では金さん、堀さん、松橋さん、福岡さん、小峰さんらの歌に注目した。P F A Sを詩的に詠んだ関沢さん、働きながら子育てする大変さを詠んだ齋賀さんら、時事・社会問題に切り込む挑戦も素晴らしい。

ただ、毎月の作品評や「今年の収穫」の選は、楽しみも大きい。一番は、良い歌に出会い堪能する楽しみである。二番目は、出

自分も頑張らねば、と皆さんの歌に励まされた「作品評」の一年であつた。

秀歌三十首十今年の収穫

田中薫

無表情でただしく標的狙ふらし競技の時もいくさの時も
十一月号・松元 雅子

寝る前の記憶をすっぱり捨て去って目覚めるごとに新しき母
十二月号・清水あかね

打ち込んだハーケンのようにうつし世に人とまみえし束の間のとき
小峰 圭子

あたしたちくらげじゃなくてよかったね 手をはなすときちゃんと寂しい
白藤 あめ

月澄める廃都の真夜のクレーンは瓦礫の海に魂を釣る
一月号・小澤 法子

選挙権もどるを喜ぶひで子さん聞わなくていい朝が来た
谷 ちえみ

見つからず癌の転移は見つからず「無し」にはあらず「見つからず」なり
麻木 直

二本線がコロナ罹患と告げており遮断機のごと世と吾を隔つ
二月号・福田樹生里

われの名を呼び捨てする者みな逝けば夕焼けに向きそと自の名呼ぶ
山口 智子

前回りできない今も逆上がりなんかもろんできずに生きる
上原 良美

窓際の席より順に伝われり「虹」の手話が教室に溢るる
友部美奈子

押し買いの電話に捨てたと答えれば罵と説かるSDGs
四月号・門田 祥子

出番待つ楽屋の鏡覗き込み九十二歳が口紅直す
曲淵江里子

わたくしをひとまず放り駅に立つ名のなき人となる春の旅
五月号・児島 直美

列車遅延の知らせ届かぬ無人駅 半時を待つ風のホームに
辻尾 修

また一つ作り置きする副菜は明日を生き抜くための言い訳
六月号・和音ひなた

三十四年妻と二人で重ねしか宿の女将と主人のひと世
尾上 宏

お米無き今年のフードドライブの隙間を埋める各々の麺
七月号・志水千登世

二人目の入学準備一番の相談先が長女となりぬ
吉見恵美子

闇深き天より響く白鳥のさびしき声は目を閉じて聞く
和田 敏典

しばらくを薔に居たる木蓮の花ほころびぬ君逝ける朝
八月号・蓬田 真弓

何者かに騙されたやうに腑に落ちない奥田さんの死を出しては仕舞ふ
奥山かほる

訃報とはあなたの報せ訃報とはあなたの口から聞けない報せ
久永 草太

鈍き音させて小葱をきざむ妻エンゼルケアを終えた夜明けに
雨雨 雨汰

周産期スタッフの「足掴みました」声さえぎ
られ産声あがる 田爪 節子

息をせぬ背なにまだ艶 撫でたればなほ抜け
やまぬやはらかき毛は 三月号・花 美月

凍て月の明かりたよりの雪の道 サギユツサ
ギユツとこの世界に独り 河尻裕美子

週末はダンス本番昼休みナースシューズでお
さらいをする 平野 純子

生まれても住んでもいない懐かしさ「ムーン
・リバー」の流れる夕べ 富見井高志

マンションの片えに白百合咲き出でてざわざ
わ寄せる摩文仁の終戦 安仁屋洋子

少なくとも気持だけは、「心の花」の一首
一首との涉り合いの様に臨んだ作品評、先
ず注目したのは、この一年ならではの題材や
其処への社会的視点を持つ作。或いは、個
性的な心象詠、周縁を良く見、洞察する囁
目詠、抒情性・詩性豊かな歌々である。

近年の月詠は一つの主題で纏める連作が大
半。一首の独立性はやや弱くとも前後との
響き合いで輝いている歌が多く、選評も自
然、一連を踏まえた内容が主流となった。

毎月の約九百首の中から二十首程を選ぶ
のも苦行ながら、年間一万首から三十首に
絞り込むのは更に忍びない作業。而も月評
とは異なり、三十首夫々には独立性が要る。
外した歌に心を残しつつ右の選歌となった。

止まぬ戦乱とバリ五輪の射撃を対置する

松元作。現実世界への透視をシュールに描く
小澤作。袴田事件終結後の谷作。詐欺多発
の世相を突く門田作。令和の米騒動下を映
す志水作。終戦八十年の沖縄から詠む安仁
屋作。どの歌も批評性記録性を併せ持つ。

次いで介護の立場で詠む清水作、出産シー
ンが力強い田爪作、手話の光景の美しい友
部作。九十二歳を活写する曲渕作。夫々の
俯瞰的客観的な描写、捉え所が魅力的。

又、生き難さと希望とを表白する和音作・
上原作や闘病中の麻木作の切々たる声は、
主観を超えた普遍性を感じさせる。他方、
困難な日常を諧謔風に、はたシニカルに詠
み飛ばす歌、芸術への志向や趣味の世界を
楽しくパワフルに伝える歌にも魅了された。

特筆すべき一年の出来事としては、七月

号以降に多く見られた奥田亡羊氏への挽歌。
「心の花」に対する氏の愛情や貢献を思う。

三十首以外の歌では、夫君への追慕が印
象的な長谷川静江、独特の語り口の新留紀
代美、父への介護とその死、遺された母を
詠み継いだ高橋秀、戦死した若者達の「生
きたかった」未来を生きる田中成尚、義母
への視線が温かい黒乃響子、思い切った毒
舌が痛快な前田恵子、世界一孤独な鯨を詠
む浜田ゆり子、心象の屈折と歌の姿の美し
さが特色の窪田稔美、洗練された場面描写
の原田治子、同室患者の死を綴る岡嶋摩美、
相手への愛情を一見ぶっきらぼうな謂いに籠
める竹井成美等々、何れも忘れ難い。

思い通りの選評には遠く届かなかったが、
巡りあつた歌の総てに学ばせて頂き、多謝。

秀歌三十首十今年の収穫

森部信次

タブコブは大地のたんこぶ朝夕の散歩に私と
柴犬が踏む
十一月号・佐々木寛子

風の圧うけて目玉はへこむらし 青空遠く気
球がひとり
青山 哲也

今はまだ人目を思う蛇口から水筒に水詰めて
いる時
十二月号・安野ゆり子

童巻にカーブミラーは半回転家の周りの間違
ひ探し
岩切喜久代

加州とは石川県ではないらしいアメリカの米
いよいよ並ぶ
山口和賀子

オレンジの大地にながき線として描かれてゐ
る馬と兵士は
一月号・大重知加子

歩きこし稜線の量^{かさ}励みにし次なるピークへ一
歩踏みだす
木場 陽子

死を背にし墓守は笑む 太陽の光を浴びて生
きて笑へ、と
鷺沼あかね

丸善も活動写真もびいどろも知らぬ子たちと
『檸檬』を読もう
熊田 新子

さくら湯はやつぱりここにあったはず 家族
で見上げた北斗七星
山川 知子

白布に睡れる君は透きとおりはじけるごとし
頬のひかりは
安富 節子

妻が閉めわれが開きて妻が閉めわれが開けた
りトイレの小窓
三月号・武富 純一

ひとひらの雪ながれ来てテーブルにしぼしと
どまる暗き^{あやま}四阿
しおせとくや

Nワゴンにリュックを三つぶち込んで人生初
の弾丸ツアー
四月号・吉川七菜子

昨夜^{さや}の夜の鯖のにはひの残りたる朝の厨に湯
を沸かしをり
小林 賢太

前足を振れども鳥に届かずに鳥をみてゐる
猫、三十分
山本枝里子

大匙に一杯ほどの塩撒きて立てば居^い反^ぞりで喝
采を浴ぶ
林 志郎

見も知らぬ国へ瘦せたる兵を出す金の鉤はは
ち切れそうだ
井田 尚子

オスプレイ今日も飛び来る普天間の空に一羽
の鷗のように
六月号・山下 葉子

片棒を担がされているように小さなリュック
に米を運びし
片山 紫

晩年のアラン・ドロンは小遊三に似てなくも
ない老いは優しき
松森 佳子

重機にて畑に押されし雪山のうずたかいまま
四月始まり
七月号・尾上 宏

春風に吹かれて思い出しているハンス・ギー
ベンラートの一生
田中 成尚

もふやかな毛を刈られたる羊らは夏をよろこ
ぶ鼓舞する両足
犬飼 亮介

更新が途絶えたままのアカウント手のなかの
死がぼんやり光る 雨雨 雨汰
街道の車にまじるお神輿は軽トラに乗り信号
を待つ 二月号・大塚 千代

くようにくようにと波打つ願ひ初春をあまた
の絵馬が風に揺られる 五月号・武藤 義哉
錆びやすき白き椿よその蕾ふくらみ初めても
う錆びてをり 鳥山 順子

道沿いにいた人は消え近づけば声も出さずに
標識になる 八月号・宮田 修
内臓と鰓は除けと百の目が睨みていたり小鰻
豆鰻 森 祐希子

心楽しい一年であった。

これまで、「葉書題詠」「メール題詠」を二
度担当させていただいた。未熟な身で他者
の作品を選ぶ不遜に戸惑いつつ、自分なり
に感銘を受けた作品を見出す喜びを知ること
ができた。

今回の「作品評」では、毎号、選者三人
分の作品を精読し、選外作の中から二十一
首をとりあげた。敢えて選外作としたのは、
一連としては特選に至らなかったものの、秀
でた一首、可能性を秘めた一首が数多く含
まれていると思うからである。自分事で恐
縮だが、かつて、選外ながら幸綱先生選「今
月の十五首」や「選歌ルーム」の注目作に
取り上げられたときの感激は忘れがたく、
大いに励みとなった。もっとも、その感激が

作歌の向上につながっていないのは情けない
限りだが。

作品選びでは、「共感」の排除につとめた。
「共感」は、ともすると個人的な「情」に
流された結果であり、客観的な視点を曇ら
せる。特に、世代的な価値観や、父母のこと、
病氣、生活の悩みなどは「情」が発現しや
すい。さらに、「共感」に頼りすぎると、自
分とはかけ離れた立場の人や、若い人の作
品に想像力が及ばなくなる。

そうした基準のもと一年間で二百十首を
選んだ。あらためて読み返すと、世代の共
通体験や自分の地元（東海地方）のことな
ど「共感」の要素が強い作も散見されるが、
もちろん作品そのものが魅力的だったから
だ。同じ作者の作品を二度、三度と選んで

いるケースがある。自分と波長が合うとい
うこともあるが、それ以上に、作者の作品
性が一貫して高いからといえよう。

各作品の評は、四行、八十字前後にまと
めた。単なる歌の解釈にとどまらず、連作
をふまえてユーモアを交えて評することで服
らみをもたせたつもりだ。

そうした二百首を超える歌の中から「秀
歌三十首」を選ぶ作業は一苦労だった。各
作品について、バックナンバーから連作とし
て読み返していただければ幸甚である。

最後に九月号より。

・相合傘の相手なければ傘寿なり雨傘日傘
くるくるまはす 辻村 澄子
・立膝をおさめるためにくりぬきし文机ご
しに糸瓜をながむ 富見井高志

秀歌五首選

梅原ひろみ

・ 吾子逝きて静まりかえる春の部屋つくえ
の脇の編みかけのベスト 伊藤 慶子
・ 池の面にふかふかゆれる葉のかたち
どこかにユリノキがあるんだね

門坂 峻

・ 荒死あらじにと祖父の口からこぼれゆくトンネ
ル工の自死語るとき 綾 香音
・ ミツバチの味方のような顔をして晴れた
十月蜂蜜を採る 田爪 節子
・ もう牛のいない小屋へと降ってきて丸
まっている冬の陽光 田中 成尚
二〇二三年十月から二年間の新入会員全

作品のうち、特選・選歌ルーム・作品評掲
載分を除いた五首選。万感の思いをモノに
託す伊藤作、日常の余白を追う門坂作、一
語一語の力が一首に集約した綾作。言葉遊
びのように軽やかな景の田爪作、陽光を擬
人化し不在を浮かび上がらせる田中作。
まだまだ選びたかった。尚、対象会員は



一〇六名、うち出詠は六七名。せっかくなので出詠してみると、より面白いかと。

塚本瑞江

- ・雪の中にぼんやりとある月だった　ホー
ムに屋根のなくなるところ　門坂　峻
 - ・逝った友目の前にならぶああ夢かいつも
通りに始まる私　杉崎　照代
 - ・小粒なら小粒であるほど好ましく心のす
きまを埋めゆく蜜柑　葉月まこ
 - ・駅前の郵便ポストが赤く無くコーヒー色
で投函ためらふ　小山よしみ
 - ・青空に気づく仕掛けになればいい地方都
市にもタワマンが建つ　田中　成尚
- 今回、失礼ながらわたしがまだお会いし
たことのない(はずの)方の作品を、想像しな
がら選びました。門坂作、ホームという舞台
が入ることで一首の世界ができた。杉崎作、
九十路の遠観というか、作者でなければど
り着けない境地と思う。葉月作、蜜柑で埋め
る隙間を想像する。小山作、ポストへのいや
もんともとれる内容が、なんだかおかしい。
田中作、タワマンをボジティブに捉える新し
さか或いはあきらめか。

竹井成美

- ・人間がアリになる日聖地への巡礼熊野
もイスラム人も　森谷　佳子
- ・頭では張り子の牛を思ひつつ怒れる客に
詫びつつけたり　鈴木　誠
- ・芋蔓のように病歴薬歴を引き摺っている
マイナ保険証　片山　紫
- ・家族葬とう営みのなべて今静かに深く命
を送る　清水　春美
- ・かくなれば二十四時間戦いますドリンク
剤のブルタブを引く　中小路和久
- ・森谷作、参詣者の普遍的な現象を言い得
て妙の上旬は、SNSによる聖地巡礼さえ想
起させる。鈴木作、カスハラ対応に「張り
子の牛」とは胸が痛む。片山作、「マイナ
保険証」の実態を、「芋蔓」と言う比喩
の裏に怒りにもじむ。清水作、「なべて今」
と「静かに深く」に、亡き人を弔う儀式の
本質に迫る空気が漂う。中小路作、労働
基準法改正後も、「かくなれば」と腹をく
くる姿が一世風靡のコマーシャルとともに
浮かぶ。

木場陽子

- ・現在も未来も過去も振り切って虚空を目
指す最終ピッチ　鎌田　康広
- ・ひざ丈の群青色で踏み出せば一步一步が
はつ夏の波　青水　時
- ・かあさんは地層みたいでありたいな君の
記憶に笑顔重ねて　伊東　美穂
- ・太陽放射改変なるかこの度は成層圏まで
伸びる日傘　山中　蕾
- ・みなぎりを忘れた身体　朝を重ねいつか
一行の詩になれますように　小峰　圭子
- ・鎌田作、岩登りの最終ピッチという珍し
い場面。緊迫感と高揚感が伝わってくる。
青水作、言葉の省略や繋がり揺らぎが
瑞々しい詩を生んでいる。伊東作、まず、「地
層みたいでありたい」に目が留まり、次の
その理由に嬉しく納得した。山中作、猛暑
を詠う作品が多かった中、日傘を成層圏ま
で伸ばした発想に涼風が起きた。小峰作、
老いを詠う作品も多かったが希望で納めた
ところに惹かれた。佇まいが美しい。

福崎享子

・漆黒に塗りゆく屋根の棟ごしに鉄床雲の
立ち上がり来る 鈴木 誠
・夫よりの珠玉の言葉「ようきたのうわし
のところへおどくじやった」

山本 友栄

・澄み切った虚しさ満ちる冬空へ高層ビル
という粗大ゴミ 十亀 弘史
・そこからは湖に落ちる陽の光さす古代の
村をゆく母狐 高 鸞石

・生涯を温めくれる言の葉を心にかざす灯
火とせん 蓬田 真弓

鈴木作、屋根の塗装の仕事詠の一首。

漆黒の屋根と鉄床雲の、形と色の対比が鮮
やか。山本作、入院中の夫が妻にかけた素
朴な声に打たれた。「大得」は最上級の褒
め言葉。十亀作、澄んだ冬の景を切り取っ
た一連で、一首の下句が強烈だった。思わ
ず笑った。高作、上句の美しい景と下句の
物語。アイヌコタンの更に古層の世界を思
う。蓬田作、挽歌の一連の最後の歌。歌の
師と思う人への感謝、万感の想いが伝わる。

松森邦昭

・秋の日の秋の光が伝え来るかすかなる音
白猫の耳 佐佐木幸綱
・よるべなき思ひに權の手を垂れて春とな
る日の葦辺にねむる 奥田 亡羊

・石は灰にならないはずだ焼かれても深々
と歌が抱きしめている 加古 陽

・舟底を擦る砂の音ききながらねむれるこ
とき日永とおもふ 横山未来子

・はなのすきなうしのすきな羊の好きな花
咲く四月 山本 陽子

十月号、佐佐木幸綱作、秋の訪れを猫の
耳から感じる繊細な歌。

二首目、五月号、奥田亡羊氏遺作。死を
受容されているかの絶唱歌。一月号では死
を予告されるような「泥凍る枯野に」の歌
あり。奥田氏への追悼歌は三首目、七月号、
加古陽氏。八月号、四首目、横山未来子氏。
五首目、山本陽子氏と流れ星が尾を引くよ
うに続く。亡羊氏の歌は加古氏の追悼歌の
様に永劫歌い継がれてゆくであろう。

井上俊英

・ガニ股の角度が同じ夫と子が二メートル
先並んで歩く 藤真 那智
・西日差すローカル線の窓際のセーラー服
に重なる青春 水野真由美

・多すぎる人に埋もれて歩くとき否応なし
に我は我なり 尾崎 桜子

・家の前に遊び足りない三輪車がほつたら
かしに夕焼けてゐる 若林 卓宣

・真ん中で折れてしまった鉛筆をけずって
二本の鉛筆にした 門坂 峻

藤真作。ガニ股の角度まで似たと観察し
ている妻。ほのぼのとした3人の姿が浮か
ぶ。水野作。ローカル線で通学した学生時
代。窓の夕日の向こうに戻らぬ青春を懐か
しむ。尾崎作。押さないで、ぶつからない
で。人ごみの中でこそ私は私なのだ。な
るほど。若林作。なかよしの幼子と三輪車。
もつと遊ぼうと思っていたのに、また明日
ねと。門坂作。物を大切にすると人柄と工夫
が窺える。二本に増え儲けた気分。ナイス。

アンケート

- ① 今年一番うれしかったこと
- ② 今年一番残念だったこと
- ③ 今年一番の歌集
- ④ 今年一番の自作の一首
- ⑤ 今年一番印象に残った社会的出来事
- ⑥ 今後取り組みたいテーマ
- ⑦ 作歌は手書き派・デジタル派
- ⑧ 「タイムマシンで吟行会」どこに行きたい
- ⑨ スランプ脱出方法
- ⑩ あなたが会ってみたい「心の花」の先輩歌人（故人）

高山邦男

- ① 若山牧水賞の授賞式で宮崎に行き、久永草太くんを始め様々な方と酒席を共にできた事。
- ② ぼろ酔いインタビュの収録後、泥酔してしまった事。最近酒が弱くなりスローペースで飲むこと心掛けています。
- ③ 賞の選考や推薦があるので特定の歌集を挙げることは差し控えます。
- ④ 寄り道をした赤羽の立ち飲み屋過ぎ去りし日々にはうばうとをり（「心の花」8月号）

- 赤羽に「いこい」という立ち飲み屋がある。安くてうまい。たくさん飲み屋に行ったが多分日本一。今は遠方でなかなか行けないが昔は仕事明けによく行った。
- ⑤ ウクライナの戦争。ガザ地区の少年。とにかく暑かったこと。
 - ⑥ 新しい抒情歌を作ること。「佐佐木幸綱と詩の言葉」を執筆すること。
 - ⑦ デジタル派。パソコンやスマホに文字を打ち込んでいます。
 - ⑧ 大伴家持の宴会。歌がたくさん記録に残っているがなんだか楽しそう。

清水あかね

- ⑨ 気の置ける仲間と酒を飲むこと。楽しくなればスランプなんてどうでも良い。
- ⑩ 新井洗 何となく陰気なイメージではあるが、短歌革新運動の余韻の中で独自の抒情を作り上げた歌人。その人柄に直に触れられるとしたらありがたい希有な機会。
- ① 十年ほど研究してきた「心の花」の先輩歌人富岡冬野の本を出すこと。書肆侃侃房より『富岡冬野 モダンガールの憂鬱』というタイトルで年内に刊行予定です。

②世界で戦火が止まないこと。日本でも格差が広がり苦しんでいる人が多くいること。

③歌集があまり読めませんでした。反省しています。

④稚くなりたる母を抱きしめる子を抱くこととのなかった腕に（「心の花」五月号）

⑤都議選、参議院選、総裁選等の選挙結果。驚きの連続でした。

⑥今まで苦手だった社会詠。

⑦スマホのメモにボチボチ打っています。

⑧アラビアンナイトの世界。空飛ぶ絨毯に乗って世界を見下ろしたいです。

⑨三十分だけと自分に言い聞かせ、とにかく取り組み始めること。

⑩富岡冬野と片山広子の語り合いをこっそり覗きたいです。どのような話をしていたのかすぐ興味があります。冬野の飼っていた犬や猫、広子の犬やインコも見せてもらいたい！

金有美

①心の花賞を頂いたこと。

②初めてコロナにかかり、後遺症に一ヶ月

近く苦しんだこと。

④ほのかなる真白のなかへ差し入れし指より生るる光の小鳥（「心の花6月号」）

⑤米の高騰。日々の暮らしに直接影響のある出来事でした。まさか倍の価格で米を買う日が来るとは。

⑦以前は手書き派でしたが、今はデジタル派。スマホのメモ機能を使っています。横書きになってしまいうのですが、活字になった様子を見ながら外でも作事ができて、気に入っています。

⑧先祖の国、はるか遠い金官伽耶子へ行ってみたいです。

⑨本を読んで刺激をもらったり、いつそ作らなかつたり。しばらく空白の時間を過ごした後は、スマホを握りしめて言葉を絞りだしてみます。

⑩竹山広さん。魂の底からの歌の数々に圧倒されました。

小林賢太

①心の花賞をいただいたことです。

②社会の右傾化が止まらなかつたこと。

③屋良健一郎『KOZA』（ながらみ書房）

④眠る前ひと日の記憶火にくべて熾火しづかに灰となるまで「心の花」六月号

⑤米価の高騰。江戸時代みたい…。人間が思っているほど人類の文明は進んでいないのでは？と感じます。

⑥自然と人事の融合。

⑦デジタル派。スマホのメモを最終的にパソコンで縦書きにして確認。

⑧ジュラ紀。恐竜を見たいです。

⑨ランダムに歌集を開き、目に入った言葉から詠む（一人いちご摘み？）。

⑩九条武子さん。どんな声、話し方が聞いてみたい。

森山なつめ

①群黎賞をいただけたことです。ありがとうございます。

②体調の都合により全国大会へ出席できなかったことです。

③安永路子『藍月』（砂子屋書房）

今年出版された歌集を読めておらず…。

④雪のない地に越しきても肉体の奥に積まれる雪の深さよ 心の花六月号

⑤参院選とそれに伴って拡大した排外主

義。

⑥ 日常をこつこつ丁寧に詠んでいきたいです。

⑦ 併用しています。アイディア出しは手書き、推敲はデジタル。

⑧ 平安時代にタイムスリップして、著名な歌枕を巡ってみたいです。

⑨ 万年スランプですが、ごくたまに残業を早く切り上げて家に帰れると、短歌のことを考える心の余裕がすこし生まれます。

⑩ 前川佐美雄。定期的に読み返す好きな歌人だから。歌会をご一緒に、彼がどのようにな歌を詠むのか、そして読むのかお聞きしてみたいです。

青山仁

① 8月に仙台で開催された東北歌会に参加し、俵万智さん、駒田晶子さんなど、東北の心の花歌人の皆さんと歌会をご一緒できました。

② 奥田亡羊さんが亡くなられたこと。全国大会や原稿執筆など、たくさん教えていただきました。

③ 『ダニーボーイ』（貝澤駿一／本阿弥書店）

④ 戦争をすっかり忘れていた頃に男は事故で死んだと知りぬ（心の花7月号）

⑤ トランプ大統領の就任と以降の混乱。「自由の国アメリカ」がこれほど脆く崩れ去るとは思いませんでした。

⑥ 社会詠。闇雲に政治や社会を批評するのではなく、テーマを絞って詠んでみたいです。

⑦ 作歌は専ら Google Keep（Google のメモアプリ）で行っています。自動的に文章が保存されるので重宝しています。

⑧ 昭和30〜40年代の上野駅。新幹線開業前の、特急・急行がひっきりなしに出発していたプラットホームに一日中いたいんです。

⑨ 旅をすること。見たことがないものを見ることで新たな視点が生まれます。また、列車や飛行機に乗っている間は、景色を見つづじくりと思案に耽ることができ重なる時間だと思っています。

⑩ 佐佐木由幾先生、石川一成さん、竹山広さん、小紋潤さん。

久永草太

① 本棚を作ったこと。

② 作った本棚に本が入りきらなかったこと。

③ 上川涼子『水と自由』（現代短歌社）

④ こんな日に心で揚げる風があり大人になっても強風が好き

（三世代のいちごみ HP <https://www.tankawalker.net/ichigo/?p=1264>）

⑤ コメ価格高騰

⑥ 土地の歌

⑦ デジタル派（悪筆なので）

⑧ 白亜紀末の大量絶滅

⑨ 待てば勝手に去っていく

⑩ 石川不二子さん。農学部トークに花を咲かせたい。

大口玲子

① 第八歌集と、聖書のみことばを黙想するための本（共著）が年末に刊行されること。

② 高熱が出て牧水祭に行けなかったこと。

③ 屋良健一郎『KOZA』（ながらみ書房）

④ いつかこの世界が正気に返るまでプーゲンピアなわれを翳せり

「短歌往来」二〇二五年八月号

⑤ 国家権力の過ちと司法による再検証（福

井女子中学生殺害事件の再審無罪判決と大川原化工機事件の冤罪認定)

⑥戦争や暴力に言葉でどう向き合うか。

⑦急いでメモするのはスマホやパソコン。作る時は鉛筆や万年筆のスピードで。

⑧東京電力福島第一原発事故前の南東北。

⑨散歩と睡眠。

⑩竹山広さんともう一度会いたい。

横山未来子

①Eテレ「NHK短歌」の選者になったこと。同番組には二十代の頃、佐佐木幸綱先生が選者の回にゲスト出演させていただきました。その番組にまさか私が…と不思議な気持ちですが、毎月貴重な経験をさせていただいています。

②四月に奥田亡羊さんが亡くなられたこと。

④薄雲にこゑをひびかせいちにんのをらぬ
世界に四十雀鳴く 「心の花」八月号

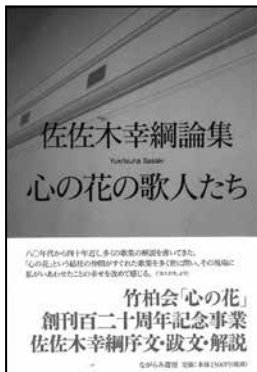
⑥時間、命。

⑦デジタル派です。自分の歌を客観的に見ることができるので。

⑧平安時代の京都。

⑨散歩をする、自然に触れる、憧れの歌人の歌集を読む。

⑩竹山広さん。尊敬しています。東京での心の花の記念大会で一度だけお会いしているのですが、もっとゆっくりお話ししてみたかったです。



竹柏会「心の花」 創刊百二十周年記念事業 佐佐木幸綱序文・跋文・解説集

八〇年代から四十年近く、多くの歌集の解説を書いてきた。「心の花」という結社の仲間がすぐれた歌集を多く世に問い、その現場に私がいりあわせたことの幸せを改めて感じる。(あとがきより)

収録歌人

石川一成・竹山広・築地正子・保坂耕人・晋樹隆彦・俵万智
宇都宮とよ・谷岡亜紀・大野道夫・大口玲子・横山未来子
田中拓也・鶴見和子・黒岩剛仁・小川真理子・矢部雅之
奥田亡羊・坂口弘・藤島秀憲・駒田晶子・齋藤佐知子
山口明子・片山廣子・橘糸重・佐佐木信綱

判型：四六判並製力バー線 頁数：276頁 定価：2300円(税別) ISBN 978-4-86629-136-9
ご購入は(有)なからみ書房 03-3234-2926 Amazon <https://www.amazon.co.jp/竹柏会/>